

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2016年9月12日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 49号



諏訪神社例大祭 8月17日

■ 5月後半～8月の活動報告(事務局).....	1
■ 定例活動2016②.....	2
「藤原の山菜&ブナ新緑の森」	
◆開催報告(草野洋・米山正寛・稲貴夫)	
■ 流域連携活動「日光茅ポッチの会訪問」.....	3
◆参加報告(増井太樹)	
■ 草原シンポジウム2016 in 東京.....	4
◆参加報告(浅川潔)	
■ ミズナラ林伐採試験地調査中間報告.....	5
「上ノ原の草原再生調査で分かったこと」(増井太樹)	
■ 定例活動2016③.....	7
「防火帯刈払い・生き物撮影会」	
◆開催報告(草野洋・川端英雄・米山正寛)	
■ 定例活動2016④.....	9
「藤原諏訪神社例大祭と草餅づくり」	
◆開催報告(草野洋)	
■ 藤原現地報告(北山郁人).....	11
■ 藤原の“ほっと”ショットコーナー(中村智子).....	12
■ 協賛団体紹介 第三回「麗澤中学校」(稲貴夫).....	13
■ 野守のつぶやき(清水英毅).....	14
編集後記	(敬称略)

■ 5月後半～8月の活動報告

【5月追加】

- 21日、22日。一般参加歓迎プログラム「藤原の山菜&ブナ新緑の森」実施。13名参加。(2頁)
- 28日、川場村の世田谷区友好の森で開催された群馬県植樹祭へ、塾長出席。

【6月】

- 11日、12日 昆虫調査、会員2名および外部専門家(プレック山崎氏)にて実施。
- 18日、19日、流域連携活動として「土呂部草原の電柵補修と自然観察会(日光茅ポッチの会訪問)」実施。募集人員上限の12名参加。日光土呂部(とろぶ)にて獣除けフェンス周辺および遊歩道の草刈、侵入木の排除作業に協力。(3頁)
- 25日 全国草原再生ネットワーク設立10周年シンポジウム(於朝日新聞東京本社読者ホール)に、会員計9名が出席するとともに運営を支援。西村幹事が青水の活動をプレゼンテーションした。塾長他は翌日の総会にも出席。(5頁)
- 26日、三重大学名誉教授三井昭二氏が総理府主催の第10回みどりの学術賞受賞記念の講演「森

林と社会の歴史と可能性」の中で、青水の活動を新しい「 commons 」として写真入りで紹介くださった。

【7月】

- 9日、10日 一般参加歓迎プログラム「防火帯刈払い&生き物撮影会」実施。11名参加。(8頁)
- 31日、群馬県森林ボランティアセンターにて、塾を紹介。草野塾長がプレゼンテーション。

【8月】

- 6日、7日、6月に続いての昆虫調査、会員2名および外部専門家1名にて実施。



- 17日、18日 一般参加歓迎プログラム「藤原諏訪神社例大祭と草餅づくり」実施。7名参加。(9頁)
- (以上)

■定例活動2016②

藤原の山菜&ブナ新緑の森

茅株移植編

米山 正寛

森林塾青水の5月の定例活動を好天に恵まれた21日～22日、群馬県みなかみ町において13人の参加で実施しました。

1日目は、参加者を山菜の採取と茅株の移植の2班に分けての活動でした。茅場(ススキ草原)の管理の一環として、茅(ススキ)の密度が低い場所への茅株の移植は少しずつ手掛けてきましたが、定例活動に取り入れたのは初めてですので、こちらを先に報告します。

参加したのは4名。場所は、上ノ原の茅場を貫く作業道脇の一角で、以前から移植を進めてきた部分です。まず初めに鍬を使った移植手順の説明を受けました。茅はひとまとまりの株として生育しているケースが多いので、作業道の南側から掘り取った茅株を、茅株の密度が低い北側に掘った穴の中へ移して周りを踏み固めれば、1回の作業が完了します。とは言え、やってみると茅



場の土はかなり固くしまっていて、大きな石が埋まっていることもあり、なかなかの力仕事でした。鍬は1枚板の唐鍬と3本爪の備中鍬とを持っていきましたが、細い爪は硬い地面で曲がってしまい、唐鍬の方がはるかに使いやすかったです。それでも曲がった爪をそのつど直しながら、なんとか力を合

わせて1時間ほどで約20株を移植し、この日の作業を終えることができました。移植した株がこれから順調に活着し、新しい場所で元気に育つことを祈っています。

山菜採取編

稲 貴夫

山菜組は、その日に宿泊する民宿関ヶ原の女将芳江さんの指導により、上ノ原の茅場東側のカラマツ林内で、山菜のミズを採取しました。

途中、上ノ原で見られる山野草についてのお話を聞きながら、茅場を抜けて木馬道に入り、ミズナラ林伐採試験地から炭焼き窯の前を抜けてカラマツ林へと進み、「ミズ」の群生している場所へ案内していただきました。ミズの公式な名前は、「ウワバミソウ」と言います。ウワバ



ミは大蛇のことで、蛇が沢山いそうな湿地によく生えることから、この名前がついたそうです。実際に案内いただいたミズの群生地は、写真の通りシダの生い茂る沢筋で、蛇と遭遇しそうな環境。でも皆さんはミズについての説明を受けると、躊躇することなく沢筋へと降りてゆきました。



途中、アクシデントもあって、全員で山菜採りはできませんでしたが、採取したミズは十分な量。持ち帰ったミズを水汲み場の前に集め、全員で葉を落とす処理を行いました。

その日の夕食では、ミズのお浸しや炒め物をはじめ、ワラビやコシアブラ、塾長が採取してきたニセアカシアの花など、採れたて、揚げたての山菜のてんぷらに舌鼓を打ったことは言うまでもありません。

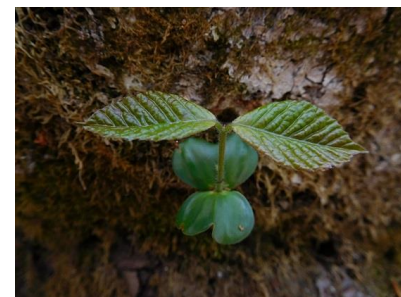
上ノ原は山菜の宝庫でもあります。守るべきルールを含めて楽しく学びながら、活用してゆきたいと思います。



ブナ新緑編

米山 正寛

2日目は、湯ノ小屋川に沿いに車を走らせ、標高1500m付近にある「奥利根水源の森」まで出かけての自然散策がメイン活動となりました。コースは駐車場のあるキャンプ場から約1kmを上って行く「森林浴のみち」です。看板によると約20分の行程ということでしたが、少し歩いては立ち止まっていたの観察を繰り返したため、1時間以上かかりました。ちょうどブナの新緑が鮮やかになりだしたところで、その美しさに目を奪われました。またハウチワカエデやウリハダカエデ、オオカメノキやオオバクロモジなども開花の時期を迎えていました。昨年が豊作だったというブナをはじめ、林床には多様な木々の芽生え



(実生苗)も多く見つかかり、どの参加者も興味が尽きない様子でした。



このブナの森は、林野庁が択伐による広葉樹林の天然更新を試みてきた場所でもあります。ただしササが優占している場所もあって、そこではブナの実生苗もやがてはササに光を奪われて、枯れてしまうことが多いようです。かつて、こうした更新作業にも関わった経験のある草野塾長の評価によると、現状は70点だとか。今後、この森が長い年月の中でどうなっていくのか、とても気になるところです。散策を終えて戻ったキャンプ場で、宿から持参したおにぎりや山菜類で昼食を済ませ、水源の森を後にしました。

車座講座

草野 洋

1日目の車座講座は、塾の発足当時から大変ご支援いただいている林 親男さんをお願いしました。

林さんは、藤原の発展をいつも考えて様々な活動を行っておられます。これまでも地域交通の運行に貢献され、町会議員も務められた郷土愛あふれる方です。

お聞きしたタイトルは「ダムができたところからの藤原の変貌」。戦後のダムができる前の藤原の様子を伺い、ダムができた経緯や藤原が変わっていく様子を語っていただきました。お話の中にたびたび出てくる「藤原の為には・・・」とこれからの藤原を託する後継者達への言葉として「無理やり押し付けても長続きしない、本人たちがやる気になることが一番」が印象に残っています。



2日目の水源の森林を散策する前に参加者の皆さんには、県道の草刈と側溝整備行っていただきました。群馬県クリーン作戦今年も参加です。

流域連携活動報告

土呂部の草原を訪ねて

増井太樹

2016年6月18日、森林塾青水の一行は、いつもの上ノ原の草原ではなく、栃木県日光市(旧栗山村)土呂部の草原で汗を流していた。これは昨年からはまった流

域連携活動の一環として、同じ関東地域で草原保全活動を実施している「日光茅ポッチの会」の活動をお手伝いするために企画されたイベントであり、後で聞いた話だが、先着12名の募集はすぐに予約で埋まってしまうほどの人気イベントであったという。

参加者のほとんどが土曜日の朝一番に首都圏を脱出し、東武鬼怒川線で鬼怒川温泉駅へ。都心から電車1本(約1400円)で気軽に行けるのも魅力の一つだろう。駅へ到着したのは10時過ぎ、それからレンタカーで小一時間、ようやく日光茅ポッチの会が管理する土呂部集落の草原にたどり着いた。目の前に見える草原は上ノ原の草原よりは少し狭く感じた。しかし、関東地域に草原があることがすでに奇跡的な現在、わずかでも草原が残されていることに私はとても気分が高揚した。昼食を食べ、早速お手伝いを開始する。この草原は、上ノ原のフィールドと同様にしばらく放置され森林化がわずかに進んでいた場所もあるため、草原の中に樹木の侵入がみられた。また、シカの食害も深刻らしく、その対策のため、電気柵が草原の周囲に張られていた。そこで、森林塾のメンバーは日光茅ポッチの会のメンバーと手分けして、侵入樹木の伐採、散策路の整備、電気柵の周辺の草刈り等を行うことになった。私は電気柵周辺の草刈りをしたのだが、電気柵の総延長は1km以上あり、2手に分かれたとはいえ、なかなかの距離があり夜のビールを美味しくさせるには十分な距離であった。この長い電気柵を設置し、柵に伸びた草が触れることの無いように(電気柵に草が触れると、電気が逃げてしまうため)、約10日に1回のペースで草刈りを行っているという日光茅ポッチの会の活動力には頭が下がる思いがした。

電気柵下の草刈りと点検補修

2~3時間ほどの作業後には、どこから出てきたのか、冷たく冷えた缶ビールを振舞ってもらった。聞くと、草原の端に湧水地があり、そこで冷やしていたとのことであった。この湧水地は「カップ(刈場)の泉」(右下写真)と言うらしく、次の日に見に行くと、綺麗に整備された湧水地があり、コップが置いてあった。水を飲むと上ノ原の水に負けず劣らずキリッと冷えた美味しい水であった。

夜はお待ちかねの懇親会、ビールだけではなく、地域の方が持ち寄ってくれたどぶろくを飲みながらの懇談となった。日光茅ポッチの会の皆さんは、自然が好きというもさることながら、茅ポッチの会の会長さんの飯村さんのファンが多く、飯村さんのソフトな人当たりや熱心さが草原を守る力になっていることを実感した。

次の日は少し離れた別の草原の見学に行った。そこには上ノ原のフィールドにはない“以前から見たかった憧れの高貴な花”やフナバラソウという全国的にも絶滅が危惧さ



れている植物がちょうど開花しており、それらを見させてもらうことができた。おそらく10年ほど前までは、もっとたくさんの場所で見られたであろうそれらの花は、数年前にはわずかに数個体となっていたが、日光茅ポッチの会の尽力により、個体数を少しずつ回復しているという。また、ニッコウキスゲやヤマトキソウ等の植物も花を咲かせており、初夏の草原に色を添えていた。

イベントの最後には美味しい手打ちそばが待っていた。草原からわずか車で3分くらいの場所にある「お食事処 大滝」は天ざるそばが絶品であった。山菜と地元産の岩魚の天ぷらが盛られて、お蕎麦もボリュームたっぷり、さらに100円で大盛にできるというコスパの良さであった。1泊2日という短い時間であったが土呂部の美しい草原、そこに咲く花や、それを守る人の良さに触れることができたとても楽しい活動となった。みなさんもぜひ来年こそは参加してみては？



※写真は日光茅ポッチの会 Facebook より引用

<https://www.facebook.com/kayabotti/>

上ノ原の草原と土呂部の草原の違い

上ノ原と土呂部の草原は直線距離にして約43kmしか離れていません。でも、ずいぶん違った印象を受けました。そこでフィールドを訪れて気づいた点を挙げておきます。次回の散策の参考になれば嬉しいです。

■管理の履歴について

上ノ原の草原は約40年前に放置。土呂部の草原は現在まで草刈りが継続。特に10年ほど前までは広範囲で草刈りが行われていた。

■かつての管理方法について

上ノ原は集落の入会地という形でみんなで使っていた。土呂部は草原が短冊状に区画分けされ、個人が使う範囲が決まっていた。

■草原を放置した際の侵入木について

上ノ原はタニウツギがたくさん。土呂部の草原にはタニウツギは侵入していない(そもそも分布しない)その代わりに、シラカバやヤマナラシが多く侵入。

■二次林の違いについて

上ノ原はミズナラ林。土呂部はクリが多く、次いでコナラが多い印象。上ノ原と標高もさほど変わらないが、ミズナラは少ない。

■草原について

上ノ原はススキが優占。土呂部は上ノ原に比べススキの密度が低くワラビが多い。特に毎年草刈りをしているところはワラビが多く、草丈や草の密度も低い印象。土呂部の草原にはフナバラソウやニッコウキスゲ、ホタル

サイコ、セイタカトウヒレンをはじめとして上ノ原には見られない草原性植物が豊富な印象。

■雪について

上ノ原は2mを超える年がほとんど。土呂部は寒いが雪はあまり積もらない。積もっても40~50cm程。

■草原シンポジウム2016in 東京

~知っていますか?草原の価値~

参加報告 浅川 潔

全国草原再生ネットワーク10周年記念事業「草原シンポジウム2016 in 東京 ~知っていますか?草原の価値~」が、6月25日(土曜日)14時から朝日新聞東京本社読者ホールで開催され、65名の方が参加され、森林塾青水のメンバーも少しお手伝いしました。

日本の草原の保全と再生、そのために情報の蓄積と共有を図ることを目的として設立された「全国草原再生

ネットワーク」が設立10周年を迎えるに当たり、草原の魅力と各地におけるこれまでの10年間の草原保全活動を紹介



し、これを契機に一般にも草原の魅力を知ってもらい、未来の子供たちにこの素晴らしい草原を引き継ぐため、これからの草原保全をいかにするか話し合われました。

第一部は、草原保全のこれまでの10年ということで、各地で草原保全に取り組む団体より、各草原の特徴、取り組みの特徴などの紹介がありました。

最初に、震災で多大な被害を受けた熊本県の阿蘇グリーンストックの清野さんより、広大な阿蘇の草原の山焼きの安全性の向上、赤牛のブランド化、阿蘇の恵みを受けている九州全県の人々の手で、草原の恵みを将来の世代に引き継ぐことを目的の「阿蘇草原再生千年委員会」の取り組みなどについて紹介されました。

次に、森林塾青水の若手幹事の西村さんより、上ノ原入会の森のフィールド紹介、活動について、これまでの活動を振り返って、茅の活用、都市と地域と上ノ原の主な関係、活動の成果、課題として継続的な人手の確保、計画的かつ安定した野焼きの実施、そしてこれか



らの方向性と、15 分の中で塾の重要な「飲水思源」「流域で支える」など盛り込んで紹介してくれました。

三番目に初めて知りましたが、15 年も活動されている「全国カヤネズミネットワーク」の嶋さんが「カヤネズミの住むカヤ原復活プロジェクト」について紹介されました。加桂川の洪水対策で、河原の土を取り除き低くする工事を国土交通省が行なうことになり、事前に団体に連絡があり、表土を保存してカヤネズミを移動させながら、また表土を戻したことで、カヤネズミが以前より多く戻ってきたようです。上ノ原でもカヤネズミの巣を見たことはありますが、実物を見たことがないので、一度探してみたいと思いました。



四番目に安比高原ふるさと倶楽部の渋谷さん(環境省OB)から「安比高原シバ草原 草原と馬事文化の維持を目指して」について発表されました。もともと南部馬の産地ということで馬と関わりが強く、草原に馬を放牧させていたようです。牛の放牧は多いですが、馬との関わりを持つ草原も魅力的と思いました。まだ団体ができて 2 年目ということでしたが、課題は高齢化ということでした。



最後に北九州市に本社のあるシャボン玉石けんの川原さんから「環境にやさしい石鹼系消火剤を用いた森林および草原保全の取り組み」について発表がありました。ジェットシューターに石鹼系消火剤を 10% 入れることにより、消火の効果が



が高く、三瓶山や雲月山の使用調査結果でも水だけより少ない量で消化できるという報告がありました。

第二部は「草原保全のこれからの 10 年～」と題して、島根県立三瓶自然館の井上雅仁さんがコーディネーターで、草原保全や自然環境保全に取り組む有識者の環境省の岡野隆宏さん、日本自然保護協会の高川晋

一さん、芸北高原の自然館／全国草原再生ネットワーク理事の白川勝信さんにより、これからの草原保全への向けての提言を、パネルディスカッション形式で議論されました。

高川さんから、各地の市民調査員と共同で進めてきた「モニタリングサイト 1000 里地調査」によると、野うさぎがこの 10 年で急減に減少している。開発や森林化などの影響か？木を切ることが必要ではないか。

岡野さんからは、草原の保全に市民が支払ってもよいと考える支払意志額は森林に比べてあまり高くない、まだまだ水源涵養や二酸化炭素吸収、草原の恵みなど草原の価値を認識している方が少ない。昨年地域で里山里地の自然環境を次世代に残すようにしたいので、「生物多様性保全上重要な里地里山」(500 箇所)を選定した。



白川さんからは、地域通貨を利用して広葉樹を薪として使えるようにする、芸北せどやま再生事業や、中学生が茅を刈って、それを買い上げるプロジェクトや、ダムカードのように草原カードを設けて、草原ファンを広げていることなどを紹介してもらいました。

今回の発表や有識者は若い方が殆どで、その中でも森林塾青水は最年少の西村さんに発表していただきましたが、これからの 10 年に少し期待ができそうな気がしました。



■ミズナラ林伐採試験地調査報告 「上ノ原の草原再生調査で分かったこと」 増井 太樹

上ノ原では 2014 年にミズナラ林の一部を伐採しました。私はその伐採跡地にどのような植物が生えてくるかについて大学で研究を行っています。2016 年 4 月 9 日に開催された森林塾青水の総会後のセミナーで研究についてご紹介しましたが、今回改めて茅風通信で研究の紹介を行いたいと思います。

<研究の背景>

火入れや草刈りをはじめとする草原の管理を止めてしまうと森林になります。上ノ原のミズナラ林はかつて草原でしたが、約 40 年前に管理放棄されミズナラ林に変わってしまいました。だんだんとミズナラ林になっていくにつれて元々草原に生育していた植物は減少してしまい、草原とミズナラ林では生育する植物は違うようになっています。

では、ミズナラ林をもう一度草原に戻すことはできるのでしょうか？もし草原に戻るとしたら、草原と同じような種類の植物が戻ってくるのでしょうか？

<研究の目的>

森が草原に戻るメカニズムが分かれば、草原に生育する植物の生育地を再生することができます。そのようなことができれば草原に生きる植物を保全することができます。そういった知見を明らかにするのが今回の研究の目的です。

<研究の方法>

樹林の伐採前と伐採後の植生を比較するために、2014 年の伐採前と 2015 年の伐採後で全く同じ場所で 1×1m の方形区を 64 ヶ所設置して植物の調査を実施しました。

また、森林内と草原の植生を比較するために、現在も管理が継続されている草原において 1×1m の方形区を 24 ヶ所設置して同様に植物の調査を実施しました。2014 年の植生調査後の秋にはミズナラ林の伐採を行いました。伐採した木はできるだけ搬出し、設置した植生調査の方形区に木が倒れたままにならないように調整しました。また、草原では出現頻度が高く、樹林の伐採前には出現頻度が低かったススキ、オカトラノオ、ヤマハギの 3 種の植物については 2014 と 2015 年に個体数、個体高、位置を記録しました。

<研究の結果と考察>

伐採前後の植生と、対象区として、草原の植生の出現頻度を示します。表の並びは 2014 年の出現頻度順で示しています。伐採前後では植生の出現頻度には大きな差は見られませんでした。

ただ、草原と比較してみますと、森林で多くみられた

表 1. 伐採前後の植生の比較

No.	種名	出現頻度 (%)		
		伐採前	伐採後	草原
1	トリアシショウマ	79.7	89.1	58.3
2	フタリスズカ	60.9	50.0	0.0
3	ツルウメモドキ	57.8	67.2	0.0
4	モミジイチゴ	54.7	57.8	0.0
5	ミスナラ	53.1	60.9	0.0
6	ミスギ	48.4	45.3	0.0
7	ノササゲ	46.9	51.6	0.0
8	ヤマモミジ	34.4	31.3	4.2
9	イタヤカエデ	32.8	46.9	0.0
10	アキノキリンソウ	28.1	35.9	12.5

表 2. 伐採前後の草原性植物の比較

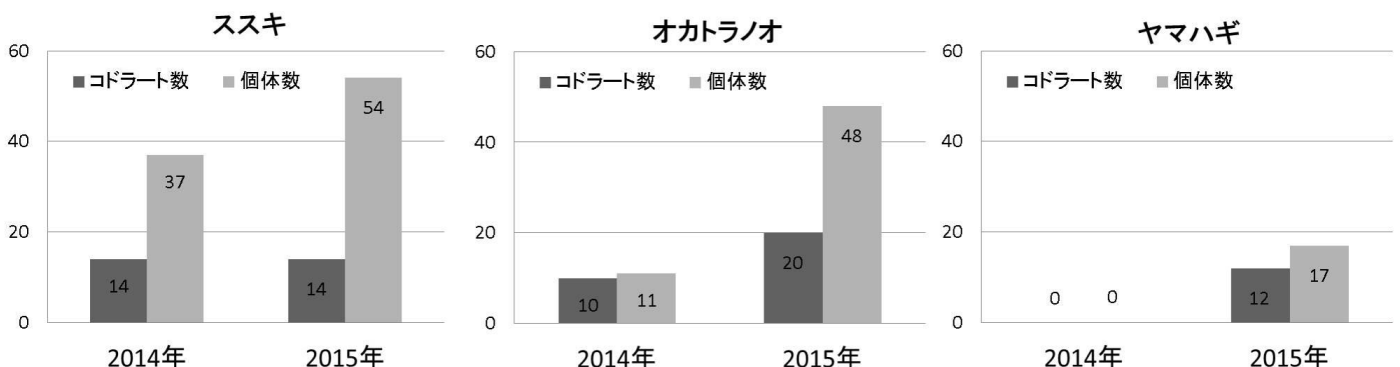
No.	種名	出現頻度 (%)		
		草原	2014年	2015年
1	ススキ	100.0	23.4	23.4
2	オカトラノオ	95.8	15.6	35.9
3	ミツバツチグリ	91.7	1.6	10.9
4	ヤマハギ	83.3	0.0	21.9
5	ニガナ	83.3	14.1	14.1
6	オオアブラススキ	79.2	4.7	17.2
7	ワラビ	75.0	9.4	12.5
8	ヨモギ	62.5	0.0	1.6
9	トリアシショウマ	58.3	79.7	89.1
10	アザミsp	41.7	14.1	23.4

植物のうち、草原でも出現した種はトリアシショウマやアキノキリンソウ、ヤマモミジの 3 種しかありませんでした。つまり草原を放棄して 40 年経過すると、草原とは全く異なる植生に変化したことがわかりました(表 1)。

次に、草原に生育している植物に着目して伐採前後の植生の変化の把握を試みました。伐採前後の草原性植物の変化を表 2 に示します。表の並びは草原での出現頻度順です。

草原の優占種であるススキは、伐採前後で出現頻度に差が見られませんでした。一方で、オカトラノオ、ミツバツチグリ、ヤマハギなどはミズナラ林の伐採後の 2015 年には増加したことがわかりました。

そこで、次にススキ、オカトラノオ、ヤマハギの 3 種に着目し、伐採前後の個体数を調査しました。(下図)



まず、ススキが確認されたコードラート数(方形区の数)と個体数を示します。ススキに関しては個体数のカウントが難しいので、茎数をカウントしました。確認されたコードラート数には変化がなかったのですが、個体数は増加しました。個体位置調査の結果、ほとんどの個体が2014年と2015年で同じ場所から出ていることや、個体高が高くなっていることから栄養繁殖によって個体数を増やしていると考えられました。

次にオカトラノオですが、確認されたコードラート数は倍増しました。現地で確認した結果、新たな場所で実生が多く確認されました。ただ、昨年からある個体の脇から新たな個体が出ているものも見受けられました。つまり、オカトラノオに関しては種子繁殖と栄養繁殖の両方で拡大していると考えられました。

次にヤマハギですが、伐採前の2014年には全く見られませんでした。個体位置および個体高調査の結果、2015年に確認された個体はすべて小さく、実生であったことから、種子繁殖によって個体数を増やしていると考えられました。

これらの植物の特性から、伐採前から森林内で生育している種は、伐採後に個体数が増加しており栄養繁殖によって個体数が増加することがわかりました。すなわち、伐採前に林内で生育していれば、伐採後に分布を拡大する可能性が高いことがわかりました。

次に、ヤマハギのように埋土種子由来と考えられる種も見られたことから、埋土種子が存在していれば、発芽する可能性もあることがわかりました。これに関してはどのような種が埋土種子を形成しているかや、種子の発芽特性などまだまだ分からないことがたくさんあります。

<まとめ>

上ノ原での研究から以下のことが分かってきました。

- ①伐採後に草原性植物は急激には増加しない
- ②伐採前から森林内で生育していた草原性植物は増加する
- ③埋土種子による植物の増加がみられた。しかし、どのような種が埋土種子を作るのかは不明。つまり、草原性植物の速やかな再生には、伐採前の林内に草原性植物が残存していることが必要であり、その残存数が多いほど、その再生も早いことが考えられました。

そして、今回の研究で分かったのは、草原はなかなか再生しないということです。また、再生するにしても、森の伐採や木の搬出など多大な労力がかかることがわかりました。美しい草原を守るのであれば、草原の再生を考えるよりも、まずは今ある草原を大切にします。これが最も効果的であると実感することができました。

<最後に>

このような研究を始めることができたのも、森林塾の皆さんが樹木の伐採や搬出をはじめ、数多くのサポートをしてくれたからであると思っています。改めてここに感謝の意を表すとともに、今後も研究を進め、草原保全に役に立つような研究を進めていけたらと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

■定例活動2016③

防火帯刈払い・生き物撮影会

活動報告 - 写真の奥深さを学んだ一日 -

草野 洋・米山正寛

2016年の7月の活動では「上ノ原の賑わい撮影会」を初めて企画・実施しました。米山さんの報告に車座講座の分を追記しての実施報告です。(草野)

7月9日(土)の日中には、藤原在住のプロカメラマン、夏目さんの指導を受ける「上ノ原の賑わい撮影会」を開きました。あいにく雨のそぼ降る中でしたので生き物たちの賑わいは期待に及びませんでした。上ノ原のススキ草原からミズナラ林を巡るコースを歩きながら約3時間にわたって、3人の参加者へ写真撮影の基本を教えていただくことができました。夜には、引き続き夏目さんによる写真撮影講座が約2時間にわたって開かれ、撮影会に参加できなかった人たちも加わって、写真の奥深さを学びました。充実した指導の内容に参加者からは、「カメラの機能を全然使っていなかった」「もっと考えて写真を撮ろうと思った」など、今後の写真撮影に向けての意欲に満ちた声があふれていました。

指導された内容のポイントを、いくつか以下に記しておきますので、ご参考に。

①撮影に当たっては、写真の構図をよく考えることが大切です。

・狙った被写体を中心に置いた「日の丸写真」はできるだけ避けましょう。被写体の位置を上下左右にずらすことで、印象の違う写真になります。ピントを中央で合わせるカメラが多いですが、狙った被写体にピントを合わせた半押し状態でカメラを動かせば、ピントの合った被写体を中央からずらすことができます。

・狙った被写体だけを撮るのではなく、その手前や奥のものも写し込むことで、写真に立体感を生み出すことができます。1枚の写真の中に、何層かにわたる被写体が写った構図も考えてみましょう。

②撮影の際は常に露出補正を意識しましょう。

・白や黄色の花など、白っぽい被写体はそのまま写すと色が飛びがちになります。カメラには露出補正機能が付いています。これをマイナス側に補正してから写すと効果的です。

・逆に黒いもの、影になった部分などを映す際にはプラス側に補正すると良いでしょう。

③条件を変えながら、たくさん撮影し、できるだけその場で確認しましょう。

・撮影した画像を液晶画面で確認することは、多くの方がやっています。構図や露出は写真のイメージを大きく変えます。どういう状態が適切かは、撮影した画像を見ないと、なかなか判断できません。条件を変えながら、たくさん写してその場で見て、自分なりのノウハウを身に付けていきましょう。フィルム写真の時代はお金もかかるし、現像しないと画像を見ることができませんでした。でもデジカメ写真なら、それができます。

・その際には、再生画面で狙った被写体を拡大して見て、きちんとピントが合っているのかも確認しましょう。色や明暗の調整は、後から画像処理ソフトですることもできますが、ピントの調整は後からではできません。確認してピントが合っていないければ、その場で撮り直せばいいのです。

④望遠をうまく使ってスナップ写真を撮ろう。

・人物と背景を合わせたスナップ写真を撮るような場合、背景の大きさに合わせると人物が小さくなってしまいがちです。そんな時は望遠レンズ(光学ズームでも可)を使えば、人物に対して背景が迫ったような形の写真を撮ることができます。圧縮効果と呼ばれるものです。

⑤光をうまく使いましょう。

・写真は、光が正面から当たっている順光で撮るのがよく、逆光で撮ってはいけないと思いませんか。夏目さんはむしろ、逆光で撮ることを心がけているそうです。

・順光は被写体がどちらかと言えば平板になりがちです。それに対して、逆光では輪郭がくっきりするといった効果が得られたり、少し光を通す木の葉などは透過光による美しい効果が得られます。

・森の中の明るい場所をスポット的に利用して構図を考えることで、魅力的な写真を撮ることもできます。

⑥カメラの絞りとシャッター速度、そして感度も意識してみよう。

・カメラをオート設定にしておくと、カメラがこれらを決めて、適正露出と判断した状態で撮影されます。しかし露出以外にも、絞りは被写界深度に、シャッター速度は被写体の動きの有無に、感度は画質の粗さに関連してきます。よりハイレベルな撮影を目指すなら、カメラを絞り優先やシャッター速度優先などの設定で使うことにより、適正露出の中でも、さまざまな撮影の工夫ができます。

写真説明
1)「上ノ原の水守地蔵」。



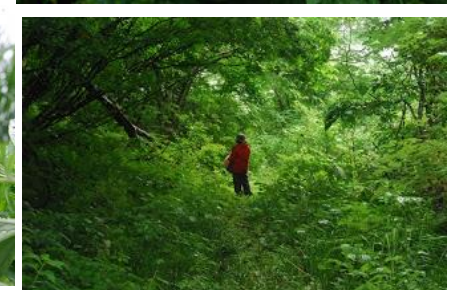
地蔵だけを中央に置いて撮影するより、地蔵を少し上にずらし、ぼけてはいても植物の葉を手前に入れたことで、奥行きを感じさせる写真になりました。

2)「雨の山道」。手前に濡れた落ち葉、中ほどに傘をさした人物、奥に霧にけぶる木々という、3層構造を意識して撮影しました。

3と4)「トリアシショウマの花」。

3は露出を自動設定のまま撮影。4はマイナス側に露出補正して撮影。4の方が白い花はくっきりと見えます。

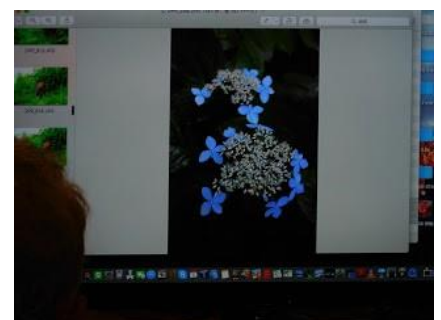
5)「ヒメシジミの雨宿り」。逆光気味に撮ることで、透過光により美しく写し出された葉の裏に潜む蝶の姿が浮かび上がりました。



6)「森のステージ」。

下を覆う草と、上からかぶさる木とがつくった緑のトンネルの向こうに、光が当たって少し明るくなった場所を見つけました。そこに立った人物を撮ってみると、印象的な写真になりました。(以上、米山記)

その日の夕食後、ロッジ「たかね」の食堂のテレビモニターを使って昼間に撮った写真を題材に夏目さんの評価・改善すべきポイントなどを解説する車座講座を実施しました。カメラ・写真の基本も交えてサンプルを使ったわかりやすい解説は



印象的な写真にするには



影が映ってしまいましたね！

目から鱗でした。最後の写真はそれを踏まえてヤマアジサイを草野が撮ってみました。写真は奥が深いですね。(以上、草野記)

活動報告 - 防火帯切りに参加して -

川端 英雄

7月9日、10日と防火帯切り(刈払い)に参加した。

9日は午後、雨中にコートを着て、10日は暑熱の中で午前中、自分はよく目立つオレンジ色のつなぎをまとっての作業だ。9日は4人が、10日は7人が参加。

プロの写真家夏目さんが指導する、雨に濡れた上ノ原の撮影会にも大いに関心があったものの、汗をかけた後のビールのうま味の誘惑が勝っての(誘惑に負けての?)刈払い参加だった。

久しぶりの刈払い機、エンジンの調子はすこぶる良し。草野塾長から聞いた、刈払い機取り扱いの注意～機械は、岩などに当たったとき我身に向かってキックバックしないように右手から左手へ、足はすり足で小またに、ブレード(刃)に植物がからまったときは必ずエンジンを止めてから取る、肩から上に機械を持ち上げないなど～を頭に浮かべながら、管理道の中央辺りから十郎太沢を右手に自動車道に向かって刈り下る。



雨が結構降り続ける。平地でのスキだけの刈り払いは、刈払い機を左から右に半転するだけで比較的楽だけれど、土地の不規則なうねりとタニウツギなどの樹木があると、機械を持上げたり、脚・腰の力加減をその都度変えねばならず、また、繁茂した草の中の岩にガツンとぶつかって、ブレード(刃)が右方向に反転して血圧が上昇するなど、結構体力を費消する。上り坂の場合は残り株を比較的短く切れてやったあ！感があるけれど、下り坂は少ない力で刈払い機を操作できるの



で、どちらかという下り坂が多い方がありがたい。

途中で混合油が切れる。注油はふたりの方が楽だ。刈払い機を地上に降ろすと、油容器の注入口が水平にならず満タンにし難い。刈払い機を斜めにするとうれやすい。このとき、ふたりいると協力しあえる。次に、始動の紐を引っ張って始動をかけるが、一発起動がなかなか難しい。エンジンの調子が良くても、始動ボタンをオンにし忘れたり、チョークを引きすぎたりと、はじめのうちはなかなか思うように動いてくれず、刈払い機に近づくのにはやや腰がひけてしまう要因のように思える。立木などの赤いリボンを目印に刈り進んだが、塾長からの注意が飛ぶ。林縁部に沿って刈っているわけだから、林縁部寄りを刈るのが当然なのに、何を血迷ったか中央寄りが刈られていた。老人力発揮の1シーン。刈り手に何か伝えたいときは、「枯れ木などを近くに投げて気づかせる」と聞いていたが、夢中で刈っていると目の前にでも物が飛んでこないかぎり気づかない。今回は甲高いホイッスルの音で、塾長に気づく。2日間の刈払いで、ゴルフ場近辺から武尊山登山道近辺の管理道までの半月形の防火帯が完成する。2日目のたくさんの参加者のおかげだ。数は力なり、を実感する。

初日、風呂上がりのビールはうまかった。

刈払い機の事前手入れ、赤いリボンによるコース案内など、草野塾長ありがとうございました。



■定例活動2016④

藤原諏訪神社例大祭と草餅づくり

草野 洋

今年の活動計画の中で異色のプログラムが8月17日、18日の諏訪神社のお祭りに合わせたプログラムで、す。昨年の参加者アンケートでお祭りに参加したいという希望が多くあって企画しました。

諏訪神社のお祭りでは獅子舞が奉納されます。この獅子舞は鎌倉時代の建久2年(1191年)に源頼朝の家臣によって伝えられたという記録があるほど古からの伝統芸能です(由来については後述)

参加者は7名、うち女性が5名と、いつもと違った雰囲気のお祭りツアーとなりました。参加者が諏訪神社に着いた11:30頃にはお祭りは



すでに始まって獅子舞の最初の演目は終わり、プロの女性演歌歌手の熱唱にウキウキする雰囲気となっていました。塾からのご祝儀と参加者のご祝儀を受付に納め、地形を利用した栈敷の一面に席をいただいて楽しむことにしました。



その後、学生や地元のカラオケ自慢の方の余興が続く、いよいよ最後の獅子舞の演目大吉利が始まります。解説を中区の獅子頭の吉野さんをお願いし、獅子舞の由来やそれぞれの舞の趣旨などお聞きして理解が深まりました。



鐘・太鼓の拍子に声楽(ショウガ)が奏でられ約1時間半にわたって3頭の獅子が舞います。途中で花笠が登場してその周りで獅子たちが絡みます。猛暑の中で中腰の姿勢で舞うことが多い過酷な舞です。途中では背中から風を送って涼ませるシーンもあります。その時がおひねりの投げ時です。参加者もおひねりを用意してきていたので舞台に向かって投げますが舞台まで届きません。Nさんの息子Mちゃんが拾って舞台に中継してくれました。たぶんおひねり投げは初体験だったでしょうがこれで祭りと一体になれたような気がしました。(お捨りを投げるシーンの動画がブログにあります)

やがて祭りも終わり段取り良い片付けを見ながら遅い昼食後、上ノ原へ。

オミナエシやヤマハギが盛りです。咲き終わりに近いヤマユリもあり



ました。ススキは野焼をしたところの成長が良いようです。

その後、群馬花と緑のクリーン作戦の県道の側溝清掃で汗を流し、宝川温泉や集落を回り本日の宿やまびこへ。

今回の車座講座は、押花インストラクターでもある宿の女将さんの林あ美子さんを講師に押花教室です。あらかじめ色落ちがないように特殊乾燥していただいた草花を使って「しおり」と「ハガキ」を作ります。

各人が好きな材料を選びあみ子さんの指導で作っていきます。どの草花をどのように配置するかそれぞれのセンスや性格が出ます。お互いに褒め



たりけなしたりしながら楽しい時間が過ぎて作品が出来上がりました。スキルを得て草花の名前も憶えられるこのような実践



的な車座講座もいいですね。(右写真はみんなの作品)



2日目は、同じくあみ子さんの指導で草餅づくりです。ヨモギを練り込んだ草餅であるは粒あん。女性陣の笑顔とやわらかな手で丸められた餅は形の良い出来栄でした。

このあと水源の森林のブナの巨木の下でお昼におい



しくいただき残りはお土産に持ち帰りました。一行は坤六峠越え片品廻りで帰路につきました。

今回は、少人数の参加でしたが藤原の文化に思い切り触れた「お祭りツアー」でした。

藤原諏訪神社獅子舞の由来

藤原獅子舞の歴史は古い。天平4年(732・聖武天皇の御代)行基(668~749)がインドと中国へ行き、この獅子舞を習得し、帰国して吉備真備に伝えた。しかし、歌詞が中国語だったので、吉備真備は山部赤人に日本語に訳させ、その後正倉院の建立に際して初めて日本語による獅子舞を奉納した。時代は巡り、源頼朝(1147~1199)が建久2年(1191)に病を得たとき、鶴岡八幡宮に平癒の祈願をし、快癒のしるしに全国の神社に銅の祠を献上した。(藤原には今日も武尊神社に伝えられた銅の祠が現存する)。1191年に相模子平太が京へ上って獅子舞を取得し、帰国して武尊神社へ奉納した。藤原の獅子舞は爾来今日まで継続している。

獅子舞は全国に多々存するが、ほとんどは土間で踊られる。しかし藤原の獅子舞は白足袋をはいて床で演じられるのが特徴的だ。

大吉利の舞台上には3匹の獅子が登場する。中央は雌獅子、両脇に雄獅子が控える。舞台袖では長唄の連中が声楽(ショウガ)を演奏する中、3獅子は山を巡ってぐるぐる回り、雄が雌を追いかける仕草をする。

かつては選ばれた人によってのみ演じられた獅子舞だが、今日、踊り手は少なく、継続が危ぶまれる地域もある。今年の下区(平出)が担当したが、下区も人口減に悩んでおり、3年後の出演を危ぶむ声もある。(伊賀記)

ブログには動画がありますので是非ご覧になり、雰囲気をお楽しみください。

■藤原現地報告

北山 郁人

私が所属する一般社団法人みなかみ町体験旅行では、学校団体を中心に自然や文化、農業などの体験学習プログラムを提供しており、年間1万人以上の子どもたちを受け入れています。

現在、都会の子どもたちの多くは、自然や農業に触れる機会が少なく、学校の校庭も通学路もすべてアスファルトやコンクリートに覆われ、土の上を全く歩かなくても生活できるような環境で暮らしています。子ども

のころにたくさん土に触れ、いろいろな雑菌を体に取り込まないとアレルギー体質になりやすいという研究発表もあります。



民泊での家族団らの食事

実際、受け入れる子どもたちの多くは、何らかのアレルギーがあり、中には間違えて食べてしまうと重篤な症状が出てしまう子どもも少なくありません。また、両親が忙しい家庭も多く、家族そろって手作りの家料理を食べた経験が、ほとんどない子どもも多くいます。

その時々とれる新鮮な野菜を収穫し、料理を作って家族で食べるという田舎では当たり前な家族団らの風景が都会では、幻となってきています。そのような状況もあり近年、林間学校などで、農家にホームステイをして、田舎の暮らしを体験したいという学校が増えてきています。子どもたちは、4、5人で各農家に分宿して、その時々農作業などのお手伝いをしながら、収穫できた野菜などを使って一緒に料理を作って、一緒にご飯を食べるといった当たり前な人間らしい暮らしをわざわざ体験しにくるのである。全くおかしな世の中になってしまったものです。

国もこのような状況を憂い、子どもに、いろいろな体験をすることによって、心身ともに健全な人間に成長できるように、平成20年から「子ども農山漁村プロジェクト」という、全国の小学生などに長期の農山漁村での体験活動を推進しています。

私自身、この壮大なプロジェクトが始まるという情報を得てから、2年間ほど全国の農山村を訪ね歩き、受け入れに適した場所を探して回りました。そして、利根川を遡りたどり着いたのが、みなかみ町藤原でした。森林塾の活動に参加したのも移住のきっかけとなりました。首都圏からのアクセスの良さ、谷川岳や武尊山などのスケールの大きな大自然、スキー、ラフティングなどアウトドアスポーツのメッカであり、温泉も豊富、そして何より利根川の源流という都市住民の命の水の故郷というストーリー性、こんなに条件のよい場所は、全国的にもここだけだと思います。今後はますますこのような農山漁村の持つ力が、評価され見直される時代になっていくと思います。



首都圏の水がめ藤原ダム

※「子ども農山漁村プロジェクト」とは、農林水産省、文部科学省、総務省、環境省が連携して、子どもたちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、力強い成長を支える教育活動として、小学校等における農山漁村での長期宿泊体験活動を推進するもの。

■藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑫
中村 智子

地元の中村智子さんが、最近撮影した藤原の動物たちの姿です。昨年はブナの豊作年であったためか、今年も親子連れの猿も頻りに姿を見せているそうです。悪戯はほどほどに目を楽しませてほしいですね(編集子)



まだ、独立したばかりのリス。頑張れ！5月9日



オンドリ♀が洞元湖で泳いでいました。8月6日



矢木沢ダムでよく見かけるチョウゲンボウ。8月10日



サルの親子。子どもをとっても大切にします。



日本鹿が茂みにいました。5月21日



サルの集団に家のゴミを食べつくされました。7月1日



クルミが生りだしたので頻りに見るリス。7月19日

■協賛団体紹介(第3回)「麗澤中学校」

稲 貴夫

森林塾青水の協賛会員として様々な形で活動にご協力いただいている企業や団体を紹介する本欄。第3回目は、千葉県柏市の麗澤中学校です。



麗澤中学校は、高等学校を併設する中高一貫校であり、他に幼稚園や四年制大学などを運営する学校法人「廣池学園」の中等教育機関です。千葉県柏市にある東京ドーム10個分の緑豊かなキャンパスは「麗澤の森」として地域の人々にも親しまれていますが、学園の前進は、モラロジー(道徳科学)を創始した廣池千九郎法学博士が、昭和10年に道徳科学専攻塾を開設したことに始まります。

廣池学園の教育理念の一端は、「仁草木に及ぶ」という言葉で表現されています。慈しみの心を人間はもとより植物にも及ぼすという意味ですが、麗澤教育の目指すべき人間像として、

○大きな志をもって真理を探究し、高い品性と深い英知を備えた人物

○自然の恵みと先人の恩恵に感謝し、万物を慈しみ育てる心を有する人物

○自ら進んで義務と責任を果たし、国際社会に貢献できる人物

の三つの柱を掲げ、そのもとに、中学校の三年間を通した学習プログラムである「自分(ゆめ)プロジェクト」を推進しています。

このプロジェクトは、一年生は自分と自然、二年生は自分と国家、三年生は自分と世界の、それぞれの関係を学び、生徒それぞれが「よりよく生きる」とはどういうことか、深く考えてゆくことを目的としています。そして一年生は、自分と自然の関係を学ぶことの最大



の目標を、「自然からの恩恵を感じる」ことに置いて、その目標のもと、樹木や森について直接学んでゆくために、

- ①キャンパス内に生育する約300種類の樹木観察
- ②奥利根水源の森を訪ねるフィールドワーク
- ③森と人間社会研究

の三つのテーマに取り組んでいます。そして青水は、①と②の実施について設立直後より協力して参りましたが、特に近年は学校当局者と連携を深めながら、全体のプログラム作成も含めて積極的に協力しています。この関係は、一年生が目指している

「自然からの恩恵を感じる」ことと、青水の活動理念である「飲水思源」とは、表現は違えどもその本質は共通しているからこそ、深まってきたものであると言えるでしょう。

今年も例年通り、麗澤キャンパスのシンボルであるヒトツバタゴの白い花が、まだ少し残っていた五月はじめに、一年生139名による樹木観察

会が開催されました。そして、青水の会員を主体とする18名のインストラクターが、工夫を凝らしながら様々な植物の見られるキャンパス内で、中学生らしい思

いもよらない感性豊かな反応に驚きつつ、9班に分かれて観察会を進行しました。

また、今年の十月に予定している奥利根フィールドワークでは、はじめて上ノ原での茅刈りに挑戦します。鎌をはじめて手にする一年生もいることですが、こうした取り組みを通じて、生徒たちが「自然の恩恵」を体感し、未来を生きる力を養ってゆくことは、青水の活動にとっても大きな励みとなるものです。今後も末永い協力関係をお願いしたいと思います。



ヤブツバキの解説(昨年)



イロハモミジのタネ



イチョウの稚樹

麗澤中学・高等学校

住所 〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1

電話 04-7173-3700 (代) FAX 04-7173-3716

URL <http://www.hs.reitaku.jp/jhs/>

■野守のつぶやき(8)
—五月から盛夏、「守り人」仲間との交流—

●この看板、目に入りませんか！ 5月21～22日、上ノ原行。到着後いつもの通り、広場周辺のゴミ拾い。腰のビニール袋がすぐいっぱい。ビンや缶のポイ捨てが多い。ワラビ採りは構わないけど、持ち込んだゴミは持ち帰って欲しい。広場



入口のこの看板、目に入りませんか！

●蜂蜜も天麩羅も美味しいけど お次は、ニセアカシア退治。満開前の花を摘んで天麩羅にすると美味しい、蜂蜜源になったり、堤防強化や緑化木としても有用だが、草原に侵入して我が物顔をされては困る。毎年この時期に根伐りを繰り返しているが根絶は難しい。今年も、管理道から広場に向かって二筋、合計7株も侵入していた。いつまで続く根競べ！？



●カエルの救出作戦 6月5日、印西牧の原へ。「亀成川を愛する会」の定例活動と総会に参加。午前中、古新田川と亀成川合流点周辺のゴミ拾いをしながら、流域に広がる田んぼの堤脚水路にカエルが落ち込んでいないか点検。トウキョウダルマガエルやアズマヒキガエルなどの救出が目的。題して、「お助け！シュロの糸作戦」。



彼らが這い登ってこれるように、水路の兩岸から手編みのシュロ糸を垂らたらしてやるのだ。提案者は船橋から通うTさん。頼もしい女性会員。

●洪水調節と湿地再生 6月12日、「渡良瀬遊水池の自然を守る利根川流域住民会議」の植生調査会。小山高校生10名も加わって実験地内の植生や昆虫調査。この日の中間結論は「ヤナギ類や外来・帰化植物の侵入が目立つが、在来・希少種も少なからず回復し残っている。良好な湿地環境の維持が今後の課題」というもの。国・地方自治体と協働して進める実験、まだまだ暑い試行錯誤が続く。

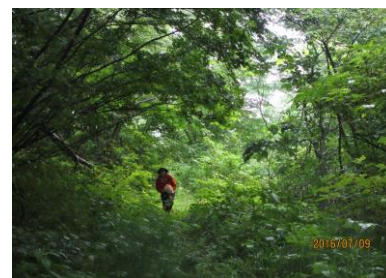


●シカ害対策の電柵設置と草刈り 6月18～19日、「日光茅ポッチの会」との流域連携活動で土呂部へ。草地植生に大きなダメージを与えるシカ対策の電気柵。その直下の草刈りと侵入樹木の除伐作業のお手伝い。上ノ原にも、シカが侵入してくるのは時間の問題。その時、此度の学びが必ず役に立つ。



●全国草原再生ネットワーク 6月25日、全国の草地の「守り人」が集まって10周年記念シンポ。当塾からも西村幹事が活動報告。合言葉『飲水思源』が大いに受けて、環境省筋からは「現在進めている森里川海プロジェクトの理念を、この四文字が全て語ってくれる」とのコメント。ならば、利根川流域コモンズを同プロジェクトのモデルに仕上げたは、と思うが如何？！

●上ノ原に妖精出現！ 7月9日。防火帯刈り払いに並行して写真教室。写真撮影のABCを、夏目先生に手取り足取り教えてもらう。草原から森に移行しつつ、教わった通りにシャッターを切ってみる。右はその時のショット。上ノ原のどこに潜んでいたのか、初めて出会った妖精！



●BPA主催「サンセ



ットクルージング」参加 8月6日。この日は「水の日」&広島原爆の日。スカイツリーの頭上に沈みゆく夕陽を眺めつつ、三番瀬の保全回復と戦争のない平和な世界の到来を祈った。

●愛蘭土への旅の夢 8月18～25日の予定。ケルトの文化が色濃く残り、自然崇拜や輪廻転生思想など日本と似たところが多い国。ギネスビールやアイリッシュウイスキーもさることながら、どんな守り人がいるのか、どんな妖精に出会えるのか。楽しみなこと。

平成28年葉月「山の日」(青)

～編集後記～

『茅風通信』第49号をお届けします。原稿をお寄せくださいました皆様に感謝申し上げます。

この夏の首都圏の水不足は、何とか危機は乗り切りましたが、7月に貯水率3割程度の八木沢ダムを見学し、改めて「飲水思源」の大切さを感じました。

この夏、初めて走った藤原湖マラソン。給水所の水の何と有り難かったことか。皆様に感謝です。(稲)